

自己愛傾向がソーシャルサポート認知に及ぼす影響

—自我脅威状況下での検討—^{1,2}

加藤 仁¹⁾ 五十嵐 祐²⁾ 吉田 俊和³⁾

問題と目的

自己愛傾向の高まりと共同性の欠如

自己愛 (narcissism) とは、自己を価値ある存在と感じ、そのことを他者にも認めてもらおうとする傾向と定義される (Raskin & Hall, 1979)。過去に比べて個人の自己愛が高まっている現代は、「自己愛の時代」と呼ばれており (Donnellan, Trzesniewski, & Robins, 2009; Twenge & Foster, 2008)、社会全体で個人の自己誇大感が増大している近年の状況は、大きな社会問題となりつつある (Holtzman, Vazire, & Mehl, 2010)。

自己愛を個人の特性のひとつとして扱う場合には、自己愛傾向という用語が主に使用される。自己愛傾向は、精神病理の概念として扱われる自己愛性人格障害 (APA, 2000) と同様に、サイコパス傾向やマキャベリズムの思考など、不適応的な行動パターンにつながる個人特性との関連が指摘されている (Jones, 2013)。

自己愛傾向の高い個人には、他者と協力して行動するのに必要な、共同性 (communality) の感覚が欠如しているという特徴がある。共同性とは、他者とポジティブな協調関係を維持することをめざす、対人関係における目標 (goals) のひとつである (Locke, 2000)。共同性の欠如は、自己愛性人格障害の診断基準 (APA, 2000) においても「共感性の欠如」として明記されている。自己愛傾向の高い個人は、優越感・有能感に基づく自己誇大感の増大によって他者を顧みなくなり、その結果、共同性の欠如がもたらされることが指摘されている (Campbell, Rudich, & Sedikides, 2002)。また、Campbell, Brunell, & Finkel (2006) は、自己愛傾向の高さが、支配性・活動性などの作動的 (agentic) な側面の自己認知と関連し、道徳性・協調性などの共同的

(communal) な側面の自己認知とは関連しないと指摘している。このように、自己愛傾向の高い個人は、不適切な対人行動をとってしまう結果、対人関係上で孤立や排斥を経験しやすくなる (Campbell & Campbell, 2009)。

また、Campbell & Campbell (2009) の文脈的強化モデルでは、自己愛傾向の高い個人の対人的相互作用における自己矛盾過程が説明されており、自己愛傾向の高さが対人関係上のリスクとなるプロセスが詳細に検討されている。このモデルに基づく、自己愛傾向の高い個人は活動的で、対人関係の初期では魅力的だと評価されるものの、同時に支配性が高く、共同性が低い。そのため、パートナーにとっては関係を維持する際のストレスが徐々に増大し、関係の継続が困難となる。その結果として周囲の他者が離れていき、対人関係での孤立や排斥が引き起こされるのである。

自己愛傾向の高さは、自己利益の追求への動機づけを高めることが指摘されている (Campbell & Foster, 2007)。このことは、自己愛傾向の高い個人が、対人関係上で自己利益を追求するあまり、他者との間でトラブルを引き起こしてしまう可能性を示唆する。また、自己愛傾向の高さは、攻撃性の高さという形でも他者に危害を及ぼす (Baumeister, Campbell, Krueger, & Vohs, 2003)。

自己愛傾向と特性自尊心

自己愛傾向と類似した概念に、特性レベルの自尊心 (特性自尊心) がある。自尊心 (self-esteem) とは、自己に対する全般的な肯定的態度であり、特性自尊心の高さは精神的健康に結びつくことが知られている。これらの概念は類似した側面をもつと共に、相互に異なる自己の側

- 1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程) (指導教員：五十嵐祐准教授)
- 2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
- 3) 岐阜聖徳学園大学教育学部

1 本論文は、第一著者が2011年度に立命館大学応用科学研究所に提出した修士論文を新たな観点からまとめ直したものである。

2 修士論文の作成に当たっては、立命館大学の岡本直子先生にご指導賜りました。ここに記して御礼申し上げます。

面を測定していると考えられる。例えば、自己愛傾向の高い個人は、顕在的には特性自尊心が高く、潜在的には低いことが示されている (Campbell, Bosson, Goheen, Lakey, & Kernis, 2007)。潜在自尊心のレベルで自己愛傾向と特性自尊心とは区別され、潜在自尊心が低いという特徴を持つ自己愛傾向の高い個人は、顕在的な特性自尊心の高い個人よりも脆弱な自己基盤を有すると考えられる。また、ネガティブなライフイベントに対する反応性の違いから、自己愛傾向の高い個人の自己基盤は、特性自尊心の高い個人よりも脆弱であることが指摘されている (Zeigler-Hill, Clark, & Pickard, 2008; Zeigler-Hill, Myers, & Clark, 2010)。

さらに、自己愛傾向は、有能性、作動性などの自己概念の指標と正の相関を示す一方で、協調性、共同性などの指標とは無相関もしくは負の相関を示す (Campbell et al., 2002)。これに対して、特性自尊心は自己概念の領域全般に対する肯定的態度であると考えられるため、作動性および共同性のいずれの領域とも正の相関を示すと予測される。このように、自己愛傾向と特性自尊心とは、自己基盤の安定性および関連する自己概念の領域において区別される。

自己愛傾向と自我脅威

自己愛傾向の高い個人は自己を高く評価するが、その評価には必ずしも客観的な根拠が存在しない。小塩 (2007) は、自己愛傾向が自己評価と他者からの評価との差異に及ぼす影響を検討し、自己愛傾向の高い個人は自己評価を高く見積もる一方で、自己評価と他者からの評価は必ずしも一致しないことを明らかにしている。このことは、自己愛傾向の高い個人が自己防衛的な動機づけを高めており、自己評価が低下して不適応状態に陥るのを防ぐために、他者からの否定的なフィードバックを歪めて認知している可能性を示唆する。

Baumeister, Smart, & Boden (1996) は、個人が他者からの評価によって対人関係上の不適応状態へ陥るプロセスについて、自己本位性脅威モデルによる説明を行っている。このモデルでは、高揚した自己評価 (望ましい自己観) が他者からの否定的な評価 (ネガティブなフィードバック) に脅かされることで、自己評価と他者からの評価との間にずれが生まれ、自己本位性への脅威 (以下、自我脅威) 状態が問題となる。自我脅威状態にさらされた個人は、その時点における自尊心である状態自尊感情が低下するため、状態自尊感情の補償を目的とした方略を取ることが示されている (田端・池上, 2011)。そのため自我脅威を受けた個人は、自己評価を上昇または低下させることで自我脅威状態から逃れようとし、結果として、脅威を与える他者への攻撃行動、もしくは対人関

係からの撤退が引き起こされる。

このモデルに基づいて、Bushman & Baumeister (1998) は自己愛と攻撃性との関連を検討している。この実験では、参加者に記述させたエッセイを他の参加者に評価させることで自我脅威を誘発し、その後の課題で競争相手に与える騒音を決定させることで攻撃性の表出を測定した。その結果、自己愛傾向の高い個人ほど、脅威を与える他者に対して攻撃性を高めることが示されている。

以上のことから、自己愛傾向の高さがもたらす対人関係上の不適応行動には、自我脅威によって引き起こされる不適切な対人方略が関連していることが予測される。特に、自己愛傾向の高い個人が、対人関係の中で孤立や排斥を経験する背景には、自我脅威状態における防衛方略のネガティブな影響が考えられる。

対人関係上の自己愛の問題

本研究では、自己愛傾向の高さが引き起こす不適切な対人方略に関する指標として、親密な他者からのソーシャルサポートに対する認知 (以下、サポート認知とする) の歪みに注目する。嶋田 (1996) は、サポートの利用可能性の認知が精神的健康にポジティブな影響をもたらすことを示唆している。すなわち、「いつでも他者からのサポートを利用可能である」と認知していれば、実際のサポートが提供されなくとも、個人の精神的健康は維持される。自己本位性脅威モデルに基づく、自己愛傾向の高い個人は、自我脅威状態に陥って対人関係上での不適応へと至るプロセスにおいて、自己誇大感を維持するために、ソーシャルサポートの利用可能性を歪めて認知している可能性が考えられる。

また、自己愛の誇大性の特徴のひとつとして、心理的・物質的資源のやり取りにおいて「送信者であるが受信者ではない」と認知している点が挙げられる (Gabbard, 1989)。本研究では、ソーシャルサポートにおける資源を、共同的側面の情緒的サポート (e.g., 慰めや励まし) と、作動的側面の情動的サポート (e.g., アドバイスや相談) に区別し、自己愛傾向との関連を検討する。

さらに、福岡 (2003) は、サポート認知を入手可能性と提供可能性のみならず、サポートの欲求度を含めた概念と捉え、心理的な負債感、自尊心への脅威との関連を検討している。本研究では、個人がどの程度サポートを「他者から受け取りたい」と感じているか、および「他者に与えられる」と認知しているかが、自己愛傾向とどのように関連するのかを個別に検討する。

一方、ソーシャルサポートについて検討する際には、サポートを受け取ることによって生じる心理的な反応についても考慮する必要がある (福岡, 2003)。サポートを受け取るとは、個人の精神的健康度を高める一方で、

自尊心への脅威や心理的な負債感を生じさせる可能性がある (Nadler, & Fisher, 1986)。自尊心への脅威や心理的な負債感とは、サポートを受け取ることでの程度「情けない」、「申し訳ない」と思うかの認知 (福岡, 2003) である。こうした認知がサポートの利用可能性と併存している状態は、サポートを受け取ることに対する心理的葛藤を生み出すと考えられる。すなわち、サポートを利用可能であると認識していても、それを受け取ることに対して脅威や負債感を抱いていれば、サポートが有効に機能しない可能性がある。

このことを自己愛傾向との関連で考えると、自己愛傾向の高い個人にとって、自我脅威状態で他者からサポートを受け取るとは、自己愛傾向の特徴である優越感・有能感を低下させ、自己誇大感の維持を困難にする可能性がある。サポートの作動的側面および共同的側面の認知を区別した場合、自己愛傾向の高い個人は、自我脅威を受けた際、自己誇大感を保つために、情緒的サポートの欲求度を減少させるとともに、情動的サポートの欲求度を増大させる方略をとることが予測される。また、自己愛傾向の高い個人は、自己誇大感を維持するために、サポートを受け取ることへの心理的な負債感を高める可能性が予測される。サポートを受け取ることに対して申し訳なさを感じることは、結果的にサポートの享受を阻害するため、サポートの利用可能性の認知の低下に結びつくと考えられる。したがって、自己愛傾向の高い個人は自我脅威を受けた際、サポートの欲求度を低下させると同時に、サポートへの負債感を増大させることで、自己誇大感を維持すると考えられる。

本研究の目的

本研究では、自我脅威状態において、自己愛傾向がサポート認知に及ぼす影響を探索的に検討することを目的とする。具体的には、個人の自己愛傾向と特性自尊心、情緒的・情動的サポート認知、およびサポート欲求度を事前に測定する。その後、自我脅威状態を実験的に操作した上で、事後のサポート認知および欲求度を測定する。自己愛傾向の高い個人は、自我脅威状態を経験し、状態自尊感情が低下した場合においてのみ、自己誇大感を維持するためにサポート認知を歪め、自我脅威状態の経験の前後でサポート認知を変化させることが予測される。一方、特性自尊心の高い個人は、自我脅威状態を経験し、状態自尊感情が低下した場合においても、自我脅威状態の経験の前後でサポート認知は歪まず、一貫していることが予測される。

なお、従来の研究では、自我脅威場面の操作として、主に課題の成績のフィードバックが用いられてきた (例えば, Bushman, & Baumeister, 1998)。これに関して中

山 (2008) は、実験で扱われている当該領域が、実験協力者にとってどれほど重要であり、大きな脅威をもたらすかを考慮する必要性を示唆している。そこで本研究では、個人的文脈に即した自我脅威場面を用いるため、芝本 (2006) の質問項目を参考に、各々異なった領域の自我脅威場面を設定して検討を行う。

方法

実験参加者

2011年10月から11月にかけて、京都府内の私立大学生177名 (男性66名, 女性111名, 平均20.5歳) を対象に個人特性に関する質問紙調査を実施した。このなかで実験参加要請に応じた52名が、2011年11月に行われた実験に参加した。このうち、実験後に質問紙への一部未回答が判明したために、2名を分析対象から除外し、50名 (男性22名, 女性28名, 平均21.6歳) を最終的な分析の対象とした。

実施の手続き

本研究は、自己愛傾向が自我脅威場面におけるサポート認知に及ぼす影響を検討することが目的であった。したがって、まず質問紙を用いて①自己愛傾向等の個人特性とサポート認知を事前に測定した。なお、本研究では心理的に負荷の高い自我脅威の実験的操作が含まれるため、質問紙で精神的健康度を測定してスクリーニングを行い、精神的健康度が高い回答者にもみ実験参加の要請を行った。その後、実験を個別に実施し、実験場面において②自我脅威の操作を行い、状態自尊感情を測定したのち、③事後のサポート認知の測定を行った。

質問紙の構成

事前質問紙は、(a) 自己愛：自己愛人格目録短縮版 (NPI-S; 小塩, 1999; 30項目5件法)、(b) 自尊心：自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982; 10項目5件法)、(c) 精神的健康度：日本版GHQ精神健康調査票 (中川・大坊, 1985より12項目を抜粋, 4件法) で構成されていた。

精神的健康度 (GHQ-12) 中川・大坊 (1985) による日本版GHQ精神健康調査票から、本田・柴田・中根 (2001) を参考に、12項目版に対応する項目を抜粋して用いた。得点が高いほど、精神的健康度が低いことを意味する。本研究では、精神的健康度が低い回答者を実験対象から除外するため、GHQ-12の尺度平均値を算出し ($\alpha = .80$), 平均値+1標準偏差をカットオフ得点 ($M = 28.21, SD = 5.19$) として、それ以下の得点の個人についてのみ実験参加の要請を行った。

自己愛人格目録短縮版 (NPI-S) 小塩 (1999) による自己愛傾向を測定する尺度を用いた。NPI-Sは、「優越感・有能感」(項目例：私は、才能に恵まれた人間で

あると思う)、「注目・賞賛欲求」(項目例：私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある)、「自己主張性」(項目例：私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う)の3因子で構成されており、総得点が高いほど、自己愛傾向が強いことを意味する。

特性自尊感情尺度 Rosenberg (1965) の自尊感情尺度を、山本ら (1982) が邦訳したものをを用いた。得点が高いほど、特性レベルでの自尊心が高いことを意味する。**実験計画および手続き**

実験は、2条件 (自我脅威条件、統制条件) を設けた、1要因2水準の参加者間計画であり、①自我脅威操作前のサポート認知の測定 (サポート認知T1)、②場面想定法による自我脅威の操作、③自我脅威操作後のサポート認知の測定 (サポート認知T2、操作チェック)、④心理的回復の操作および操作チェックという手順で行われた。

実験参加者は1名ずつ実験室に来室し、はじめにサポート認知に関する質問紙に回答した。次に、自我脅威の操作のために、2条件 (自我脅威条件、統制条件) のいずれかに無作為に割り付けられ、後述する記述課題を実施した。また、自我脅威の操作チェックとして状態自尊感情に関する質問紙に回答した。その後、自我脅威の操作後のサポート認知の歪みを測定するために、サポート認知を測定する質問紙に再度回答した。

また、自我脅威場面を想起した後の実験参加者の心理的回復を図るために、実験の終了後、リラックス場面の想起を含む場面想定法による質問紙 (筆者による作成；リラックスしたときの状況と感情) に回答を求めた。また、心理的回復の操作チェックとして、回答後の気分を測定した。その後、実験参加者に対して、本研究の目的に関するデブリーフィングを行った。

なお、サポート認知と状態自尊感情を測定する質問紙は、事前と事後でカウンターバランスを取り、項目の順序を入れ替えた。

サポート認知の測定 福岡 (2000) のソーシャルサポート尺度の21項目から、情緒的サポートおよび情報的サポートに分類される3項目 (計6項目) を抜粋して使用した。また、福岡 (2003) にならぬ、6項目それぞれについて、自分と周囲の人たちとのサポートのやり取りに関して、欲求度 (どの程度してほしいと思うか)、心理的な負債感 (もししてもらったとしたら、どの程度「すまない」「申し訳ない」と感じるか)、提供可能性 (どの程度してあげられると思うか) の3つの側面について回答を求めた (計18項目5件法)。

自我脅威の操作 実験参加者は、自我脅威条件、もしくは統制条件のいずれかに無作為に割り付けられ、記述

課題を行った。課題の回答時間および分量は実験参加者の任意であり、実験者に声をかけることで課題を終了した。なお、課題に要した時間はおよそ15分から30分の間であった。自我脅威条件では、誰かに「何かをされた」、もしくは「何かを言われた」ことで、強い否定的な感情を感じたときの状況と感情を回答するよう求めた。統制条件では、印象に残っている建物 (建築物) を見たときの状況と感情を回答するよう求めた。自我脅威条件の課題は芝本 (2006) を参考に作成し、統制条件の課題は筆者が独自に作成した。

状態自尊感情尺度 阿部・今野 (2005; 2007) の作成した状態自尊感情尺度を用いた (9項目5件法)。得点が高いほど、状態自尊心が高いことを意味する。

結果

操作チェック

記述課題による自我脅威操作が適切に行われていたかを確認するために、自我脅威操作後の状態自尊感情に対して、特性自尊心を共変量として統制した共分散分析を行った。その結果、自我脅威操作後の状態自尊感情の平均値は、自我脅威条件 ($M = 25.11$) で統制条件 ($M = 30.47$) よりも有意に低かった ($F(1, 47) = 9.41, p < .01$)。したがって、自我脅威の操作は成功していたと考えられる。

また、自我脅威を経験した後、リラックス場面を想起することで、実験参加者の心理的回復が行われたかどうかについても検討した。対応のない t 検定の結果、自我脅威条件における状態自尊感情の平均値は、自我脅威操作の直後 ($M = 25.11$) に比べ、リラックス場面の想起後 ($M = 35.01$) に有意に高くなっていた ($t(25) = 7.86, p < .001$)。したがって、自我脅威を経験した後の心理的回復は適切に行われたと考えられる。

サポート認知に関する因子分析

サポート (T1) の欲求度6項目について因子分析 (重み付け最小二乗法、プロマックス回転) を行った結果、先行研究と同様の2因子構造 (情緒的サポートの欲求度3項目、情報的サポートの欲求度3項目) が確認された。また、サポート (T1) の心理的負債感、提供可能性についても、同様の結果が得られた。そこで、サポート (T2) の欲求度、心理的負債感、提供可能性についても、サポート (T1) と同様の2因子構造を想定して信頼性係数の算出を行った。

各因子の信頼性係数を Table 1 に示す。情緒的サポート (T1) の提供可能性、情報的サポート (T1) の欲求度、情報的サポート (T2) の心理的負債感の信頼性係数は、 $\alpha = .62 \sim .68$ とやや低かったが、他の因子については

Table 1 各変数の記述統計量 (n = 50)

	M (SD)	得点範囲	α
自己愛傾向	87.10 (19.52)	30-150	.90
特性自尊心	29.30 (7.17)	10-50	.80
情緒的サポート (T1)			
欲求度	12.76 (2.43)	5-15	.80
心理負債感	9.08 (3.10)	5-15	.80
提供可能性	11.92 (1.69)	5-15	.62
情報のサポート (T1)			
欲求度	11.36 (1.78)	5-15	.68
心理負債感	8.20 (2.68)	5-15	.74
提供可能性	11.16 (2.15)	5-15	.70
情緒的サポート (T2)			
欲求度	12.48 (2.61)	5-15	.76
心理負債感	9.48 (3.11)	5-15	.71
提供可能性	12.24 (2.16)	5-15	.81
情報のサポート (T2)			
欲求度	12.00 (2.9)	5-15	.78
心理負債感	8.60 (2.91)	5-15	.66
提供可能性	11.44 (1.79)	5-15	.76

$\alpha = .70 \sim .81$ と十分な値であった。したがって、以降は因子分析で得られた情緒的サポート、情報のサポートの各因子の合計得点を分析に用いた。ただし、信頼性係数の低さに基づく相関の希薄化が起きている可能性については、留意する必要がある。

記述統計

各変数の記述統計量(平均値, 標準偏差, 得点範囲, 信頼性係数)をTable 1に示す。自己愛傾向および特性自尊心の平均値は, 小塩(1999)および山本ら(1982)でみられるものと同程度の範囲であった。また, サポート認知については, 欲求度および提供可能性が得点範囲の中央値よりもやや高く, 心理的負債感が得点範囲の中央値と同程度であった。サポート認知の各側面の平均値

は福岡(2003)と同様の水準であり, サポート認知の測定は適切であったと考えられる。

これらのことから, 本研究のサンプルは, 友人との情緒的・情報のサポートの交換については平均よりも高い水準であること, また心理的負債感を強くは感じていないことが考えられる。

相関分析

自己愛傾向と各変数との関連を検討するため, 自我脅威条件と統制条件において, 自己愛傾向, 自尊心, 年齢, 性別, 2つの測定時期(T1, T2)における情緒的・情報のサポートの欲求度, 心理的負債感, 提供可能性の間で相関係数を算出した(Table 2)。

まず, 情緒的・情報のサポートの欲求度, 心理的負債

Table 2 変数間の相関関係

	自己愛	自尊心	年齢	性別	情緒的サポート (T1)			情動的サポート (T1)			情緒的サポート (T2)			情動的サポート (T2)		
					欲求	負債	提供	欲求	負債	提供	欲求	負債	提供	欲求	負債	提供
自己愛		.62**	-.35	-.37	.51**	-.05	.52**	-.39	.08	.58**	-.59**	-.36	.45*	-.66***	-.29	.56**
自尊心	.22		.25	-.01	.28	-.18	.25	-.27	-.01	.43*	-.45	-.35	.16	-.63**	-.14	.27
年齢	.10	-.09		.18	-.36	.13	.02	.19	.00	.02	.11	.28	-.14	-.03	.33	-.15
性別	-.34	.21	-.29		.24	-.02	-.16	.04	.05	-.28	.35	.09	-.15	.20	.09	-.35
情緒 (T1)																
欲求	-.14	-.05	.29	-.49*		.29	.22	-.10	.36	.37	.16	.00	.19	-.14	.18	.17
負債	.21	-.73***	-.02	-.28	.05		.05	.43*	.72***	.35	.29	.90***	-.06	.25	.62**	-.07
提供	.46*	-.05	-.48*	-.40	.18	.11		.03	-.04	.42*	-.14	.02	.95***	-.28	-.03	.79***
情報 (T1)																
欲求	-.27	.61**	-.38	.44*	-.11	-.26	-.36		.08	-.24	.61**	.44*	.05	.64***	.31	-.11
負債	.59**	-.62**	.08	-.45*	.00	.86***	.40	-.57**		.60**	-.04	.68***	-.03	-.11	.72***	.19
提供	-.18	.24	-.62**	-.13	.45*	-.26	.66***	.21	-.27		-.45*	.23	.33	-.58**	.38	.64***
情緒 (T2)																
欲求	-.39	-.20	.17	-.39	.87***	-.14	.26	-.32	-.15	.55**		.37	-.10	.60**	.40*	-.41*
負債	-.68***	-.53**	-.54**	.16	-.05	.08	.21	-.12	-.11	.44*	.34		-.05	.32	.66***	-.10
提供	.19	.55**	-.67***	-.06	.21	-.25	.64**	.46*	-.20	.85***	.12	.05		-.21	-.05	.84***
情報 (T2)																
欲求	-.40	.59**	-.48*	.64**	-.50*	-.65**	-.27	.72***	-.80***	.20	-.36	.20	.32		.10	-.36
負債	.21	-.41*	-.66***	.11	-.59**	.55**	.40	-.07	.53**	.03	-.51*	.42*	.14	.04		.10
提供	-.27	.26	-.69***	.06	.16	-.46*	.61**	.17	-.42*	.92***	.41*	.57**	.76***	.43*	.12	

Note. 対角右上は自我脅威条件 (n = 26), 左下は統制条件 (n = 24)。自己愛は自己愛傾向, 自尊心は特性自尊心, 欲求は欲求度, 負債は心理的負債感, 提供は提供可能性を示す。*p < .05, **p < .01, ***p < .001。

感, 提供可能性について, 測定時期間 (T1, T2) の関連を検討した。自我脅威条件においては, 情緒的サポートの欲求度を除く測定時期間の関連がいずれも有意であり, 高い正の相関を示した (r = .64~.95)。また, 統制条件においては, 情緒的サポートの心理的負債感を除く測定時期間の関連はいずれも有意であり, 高い正の相関を示した (r = .53~.92)。これらの結果は, 自我脅威の操作の有無にかかわらず, 2時点間のサポート認知が強く関連していることを示す。

次に, 自己愛傾向および特性自尊心とサポート認知との関連について検討した。自我脅威条件において, 自己愛傾向は情緒的サポート (T1) の欲求度, および情緒的サポート (T1, T2) と情動的サポート (T1, T2) の提供可能性と正の相関を示し, 情緒的サポート (T2) および情動的サポート (T2) の欲求度とは負の相関を示した。統制条件においては, 自己愛傾向は情緒的サポート (T1) の提供可能性, および情動的サポートの心理的負債感と正の相関を示し, 情緒的サポート (T2) の心理的負債感と負の相関を示した。

一方, 自我脅威条件において, 特性自尊心は情動的サポート (T1) の提供可能性と正の相関を示し, 情動的

サポート (T2) の欲求度と負の相関を示した。統制条件においては, 特性自尊心は情緒的サポート (T1, T2) と情動的サポート (T1, T2) の心理的負債感と負の相関を示し, 情動的サポート (T1), 情緒的サポート (T2) の提供可能性および情動的サポート (T2) の欲求度と正の相関を示した。

以上より, 測定時期にかかわらず, 自我脅威条件では自己愛傾向が情緒的・情動的サポートの提供可能性の高さと関連し, 統制条件では特性自尊心が情緒的・情動的サポートの心理的負債感の低さと関連していることが明らかとなった。

自我脅威の操作が測定時期ごとのサポート認知に及ぼす影響

自我脅威の操作がサポート認知に影響を与えたかどうかを検討するため, 自我脅威の操作 (自我脅威条件, 統制条件) と測定時期 (T1, T2) を独立変数とする2要因混合計画の分散分析を, 情緒的・情動的サポートの欲求度, 心理的負債感, 提供可能性をそれぞれ従属変数として行った。

分析の結果, 情緒的サポートの欲求度については, 条件の主効果 (F(1, 48) = 9.30, p < .01) のみが有意であり,

Table 3 自己愛傾向が情緒的サポートの認知 (T2) に及ぼす影響 (パス係数)

	情緒的サポート (T2)					
	欲求度		心理的負債感		提供可能性	
	自我脅威条件	統制条件	自我脅威条件	統制条件	自我脅威条件	統制条件
自己愛傾向	-.40	-.61***	.26	-.56***	-.86**	.02
特性自尊心	-.20	.06	-.64*	-.43***	-.44	.56***
年齢	-.02	.07	.51*	-.54***	.25	-.73***
性別	.21	-.59***	-.09	-.10	.12	-.38***

Note. 下線は条件間で有意差あり。 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 4 自己愛傾向が情動的サポートの認知 (T2) に及ぼす影響 (パス係数)

	情動的サポート (T2)					
	欲求度		心理的負債感		提供可能性	
	自我脅威条件	統制条件	自我脅威条件	統制条件	自我脅威条件	統制条件
自己愛傾向	-.58*	-.40***	-.02	.48***	.72*	-.40**
特性自尊心	-.22	.59***	-.022	-.62***	-.23	.36**
年齢	-.19	-.30***	.37	-.71***	.17	-.72***
性別	.02	.30**	.02	.20*	-.12	-.36**

Note. 下線は条件間で有意差あり。 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

自我脅威条件 ($M = 11.81$) よりも統制条件 ($M = 13.50$) でサポート認知得点が有意に高かった。情緒的サポートの心理的負債感、提供可能性においては、いずれの主効果・交互作用も有意ではなかった。

また、情動的サポートの欲求度については、測定時期と自我脅威の操作との交互作用 ($F(1, 48) = 8.30, p < .01$) が有意であったため、単純主効果検定を行った。Bonferroni法による多重比較の結果、統制条件のT2 ($M = 13.33$) よりも、自我脅威条件のT2 ($M = 10.77$) で、情動的サポートの欲求度が有意に低かった ($p < .01$)。

さらに、情動的サポートの心理的負債感については、測定時期と自我脅威の操作との交互作用 ($F(1, 48) = 5.07, p < .05$) が有意であったため、単純主効果検定を行った。Bonferroni法による多重比較の結果、自我脅威条件のT2 ($M = 9.77$) よりも、統制条件のT2 ($M = 7.33$) で、情動的サポートの心理的負債感が有意に低かった ($p < .01$)。情動的サポートの提供可能性においては、いずれの主効果・交互作用も有意ではなかった。

本研究では、自我脅威の操作が測定時期ごとのサポート認知に及ぼす影響について、自我脅威条件においてサポート認知 (T2) がサポート認知 (T1) よりも低下す

る一方で、統制条件においては測定時期間でサポート認知は変化しないという結果を予測していた。しかし、分散分析の結果から、自我脅威の操作によるサポート認知の変化には明確なパターンがみられなかった。これは、自我脅威の操作がサポート認知の歪みを引き起こすには不十分であったことと、サポート認知 (T1) を実験の開始直後に測定したため、自我脅威の操作後に測定したサポート認知 (T2) との関連が強く見られたことに起因すると考えられる。

自己愛傾向と特性自尊心がサポート認知に及ぼす影響

自己愛傾向が、自我脅威の操作後の情緒的・情動的サポートの欲求度、心理的負債感、提供可能性 (T2) に及ぼす影響を検討するために、年齢、性別を統制した上で、自己愛傾向と特性自尊心を同時に投入したパス解析を行った (Table 3, 4)。分析の際は、自我脅威条件と統制条件を込みにして多母集団同時分析を行った。なお、相関分析の結果から、条件間で変数間の影響力が異なると考えられたため、パスに等値制約は設定しなかった。また、分散分析の結果から、サポート認知 (T1) とサポート認知 (T2) が強く関連していたことから、多重共線性を回避するため、統制変数にはサポート認知 (T1)

を含めずに分析を行った。

自己愛傾向がサポート認知に及ぼす影響 分析の結果、自我脅威条件では、自己愛傾向が情緒的サポート (T2) における提供可能性を低めていた。これは、自己愛傾向の高い個人が情緒的なサポートを提供しないと認知している傾向を示す。また、自己愛傾向は情動的サポート (T2) の欲求度を低め、提供可能性を高めていた。これは、自己愛傾向の高い個人が情動的サポートを求めようとはしないが、提供はすると認知している傾向を示す。

統制条件では、自己愛傾向は情緒的サポート (T2) における欲求度および心理的負債感を低めていた。これは、自我脅威を受けない場合に、自己愛傾向の高い個人が情緒的なサポートを求めようとはせず、サポートを受けることに申し訳なさを感じる傾向を示す。また、自己愛傾向は情動的サポート (T2) の欲求度および提供可能性を低めていた。これは、自我脅威を受けない場合に、自己愛傾向の高い個人が情動的サポートを求めようとはせず、提供はしないと認知している傾向を示す。

特性自尊心がサポート認知に及ぼす影響 特性自尊心がサポート認知に及ぼす影響について、自我脅威条件では、特性自尊心が情緒的サポート (T2) における心理的負債感を高めていた。これは、特性自尊心の高い個人が情緒的なサポートを受けることに申し訳なさを感じる傾向を示す。また、特性自尊心は情動的サポート (T2) に有意な影響を及ぼさなかった。

一方、統制条件において、特性自尊心は情緒的サポート (T2) における心理的負債感および提供可能性を低めていた。これは、自我脅威を受けない場合に、特性自尊心の高い個人が情緒的なサポートを受けることに申し訳なさを感じる一方で、提供はすると認知している傾向を示す。また、特性自尊心は情動的サポート (T2) の欲求度および提供可能性を高め、心理的負債感を低めていた。これは、自我脅威を受けない場合に、特性自尊心の高い個人が情動的サポートを求め、かつ提供すると認知している一方で、サポートを受けることに申し訳なさを感じないという傾向を示す。

自我脅威条件と統制条件の比較 自己愛傾向がサポート認知に及ぼす影響について、自我脅威条件と統制条件とでパス係数の群間比較を行った。その結果、情緒的サポート (T2) の心理的負債感に対する自己愛傾向からのパス係数の大きさは、自我脅威条件 (.26) と統制条件 (-.56) とで有意な差がみられた ($p < .001$)。また、パス係数は統制条件においてのみ有意であり、自我脅威条件においては有意ではなかった。これは、統制条件においてのみ、自己愛傾向が情緒的サポートの心理的負債

感を低めていたことを示す。提供可能性に対する自己愛傾向からのパス係数の大きさは、自我脅威条件 (-.86) と統制条件 (.02) とで有意な差がみられた ($p < .001$)。また、パス係数は自我脅威条件においてのみ有意であり、統制条件においては有意ではなかった。これは、自我脅威条件においてのみ、自己愛傾向が情緒的サポートの提供可能性を低めていたことを示す。さらに、情動的サポート (T2) の提供可能性に対する自己愛傾向からのパス係数の大きさは、自我脅威条件 (.72) と統制条件 (-.40) とで有意な差がみられた ($p < .001$)。また、パス係数はいずれの条件においても有意であった。これは、自己愛傾向が自我脅威条件においては、情動的サポートの提供可能性を高め、統制条件においては、情動的サポートの提供可能性を低めていたことを示す。

また、特性自尊心がサポート認知に及ぼす影響についても、自我脅威条件と統制条件とで群間比較を行った。その結果、情緒的サポート (T2) 提供可能性に対する特性自尊心からのパス係数の大きさは、自我脅威条件 (-.44) と統制条件 (.56) とで有意な差がみられた ($p < .001$)。また、パス係数は統制条件においてのみ有意であり、自我脅威条件においては有意ではなかった。これは、統制条件においてのみ、自己愛傾向が情緒的サポートの提供可能性を高めていたことを示す。

これらの結果から、自己愛傾向が情緒的サポートの心理的負債感および提供可能性、情動的サポートの提供可能性に及ぼす影響について、自我脅威条件と統制条件との間で明確な違いがみられた。特に、自己愛傾向が情緒的サポートおよび情動的サポートの提供可能性に及ぼす影響について、条件間で有意な差がみられた。これは、自我脅威条件において、自己愛傾向が情緒的サポートの提供可能性を低め、情動的サポートの提供可能性を高める傾向が、統制条件と比較してより顕著にみられることを示すものである。

考察

本研究は、自我脅威状態において、自己愛傾向がサポート認知に及ぼす影響を探索的に検討することを目的として、自己愛傾向と自我脅威操作前後でのサポート認知との関連について検討を行った。その結果、自我脅威を経験した後、自己愛傾向は情緒的サポートの提供可能性を低めていた一方で、情動的サポートの欲求度を低め、提供可能性を高めていた。また、特性自尊心は情緒的サポートに対する心理的負債感を高めていた一方で、情動的サポートには有意な影響を及ぼさなかった。

自己愛傾向と特性自尊心とがサポート認知に及ぼす影響を比較した結果、情緒的・情動的サポートの提供可能

性との関連に明確な違いがみられた。自己愛傾向によって両サポートの提供可能性が低く認知されることで、自我脅威の緩衝効果がもたらされた一方で、特性自尊心はサポートの提供可能性と有意な関連を示さなかった。このように、サポートの提供可能性の認知において、自己愛傾向と特性自尊心とは区別され、また自己愛傾向がサポート認知の歪みに影響していることが明らかとなった。

自己愛傾向がもたらすサポート認知の歪み

自我脅威条件において、自己愛傾向は情緒的サポートの提供可能性を低めていた。自我脅威を受けた際にサポートの提供可能性を低下させることは、対人関係における自己の共同的側面を軽視することにつながる。また、自己愛傾向は情動的サポートの欲求度を低め、提供可能性を高めていた。自我脅威を受けてサポートへの欲求度を低下させ、提供可能性を増大させることは、サポートを受けることによってもたらされる自己の優越感・有能感への脅威を防ぐと同時に、対人関係における自己の作動的側面を重視することにつながる。これらのことから、自己愛傾向の高い個人が自我脅威を緩衝する方略は、サポートの種類によって異なることが示唆される。

自己愛傾向とサポートの2側面との関連

先行研究の議論から、情緒的サポートは自己の共同的側面と、情動的サポートは自己の作動的側面と関連すると考えられる (Campbell et al., 2006; 福岡, 2003)。自我脅威を経験した個人が情緒的サポートの提供可能性を低めることは、情緒的なつながり、すなわち自己の共同的側面を軽視することを示し、情動的サポートの提供可能性を高めることは、資源の提供、すなわち関係上の優位性の確保 (自己の作動的側面の重視) につながる。T1において自己愛傾向と情緒的サポートの提供可能性の高さが関連していたこと ($r = .46 \sim .52, ps < .05$) を考慮すると、自己愛傾向の高い個人は、自我脅威を経験した際、自己の作動的側面を重視することで資源を保持する、という自己防衛方略をとっていたことが考えられる。

自己愛と対人適応

本研究の結果から、自己愛傾向の特徴である対人関係における共同性の欠如、および自己の作動性の重視により、適切なサポートの交換が阻害されている可能性が明らかになった。個人の対人適応は、対人関係の中でサポート資源の交換が適切になされることで達成される。また、他者とサポートを相互に交換し合うことは、その関係の継続可能性を高めると考えられる。しかし、自己愛傾向の高い個人は、他者とのサポート授受のプロセスにおいて非互恵的な方略を選択してしまう結果、他者に関係継続上の負担感を増大させ、結果的に関係が破たんしてし

まうことが推測される。本研究の知見は、自己愛傾向の高い個人が対人不適応に陥るメカニズムを検討する際、ソーシャルサポートのプロセスを扱うことが重要であることを示唆する。

自己愛傾向の高さによる対人関係上のリスクを低減させる介入方略として、Thomaes, Bushman, de Castro, Choen, & Denissen (2009) は、自己評価に対する自覚的な基盤を与えることで、自己愛傾向の高い個人も安定した自己評価を獲得することが可能となると指摘している。しかし、客観的な根拠を伴わずに自己評価を高めることは、自己愛傾向の特徴である自己誇大感をより増大させることにもつながり、他者との相互協調的な関係の構築を妨げることにもなりかねない。

本研究の知見は、自己愛傾向の高い個人が抱く対人不適応への介入について、作動的側面における自己評価を高めることで自己基盤の安定化を導く従来の方略よりも、むしろ共同的側面の自己認知を活性化させる方略が適切である可能性を示している。共同的側面の自己認知を活性化させることは、他者との協調的な相互作用を促進し、肯定的自己認知および他者からの肯定的認知にもつながる。そのため、自己愛傾向の高い個人にとっても、客観的な根拠を伴った自己基盤の安定化を図ることが可能となるだろう。

今後の課題

最後に、本研究の課題と展望に関して述べる。まず、本研究では自我脅威条件よりも統制条件において、自己愛傾向および自尊心がサポート認知に及ぼす影響が強かった。この原因としては、統制条件の記述課題が適切でなかった可能性があり、実際に発生したライフイベントを記述してもらうなどの改善が必要である。また、サポート認知の指標については、T1とT2の間で非常に強い相関が見られた。これは、T1とT2の測定間隔が短かったためと考えられ、サポート認知の自我脅威操作前の測定については、実験参加者の募集段階で行う必要があるだろう。

また、自我脅威場面におけるソーシャルサポートの検討にあたっては、情緒的・情動的サポートのみならず、道具的サポートについても考慮する必要がある。本研究では、自己の作動的側面に影響を与えるサポートとして、情動的サポートを用いていたが、道具的サポートは実際の物質のやり取りを含むため、自己の作動的側面に影響を与える測定指標としてより適切であると考えられる。

本研究の知見は、効果的な対処をもたらす専門機関への受診行動の促進など、予防的介入の観点からも重要である。自己愛傾向は、対人不適応と関連する個人特性であり、専門機関を受診する来談者の中にもその特徴が認

められる。自己愛傾向の特徴である自己誇大感や共同性の欠如は、対人不適応的な行動やそれに起因する被排斥、孤立などの心理的苦痛とも関連している。これらの事象に対して適切な介入を行うためには、自己愛傾向の高い個人のサポートに対する認知のバイアスを理解する必要がある。本研究の見聞からは、自我脅威状態における自己防衛方略として、ソーシャルサポートを歪めて認知することが示唆された。自己愛傾向の高い個人が受け取りやすいと感じられるサポートを検討することで、心理臨床的な観点からも有用な介入方策が得られるだろう。

引用文献

- 阿部美帆・今野裕之 (2005). 状態自尊感情尺度の作成の試み パーソナリティ研究, 14, 125-126.
- 阿部美帆・今野裕之 (2007). 状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究, 16, 36-46.
- American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. (Text Rev 4th ed). Washington DC: American Psychiatric Association.
- (American Psychiatric Association 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸 (訳) (2003). DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き (新訂版) 医学書院)
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103, 5-33.
- Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles?. *Psychological science in the public interest*, 4(1), 1-44.
- Bushman, B. J., & Baumeister, R. F. (1998). Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, 75(1), 219-229.
- Campbell, W. K., Bosson, J. K., Goheen, T. W., Lakey, C. E., & Kernis, M. H. (2007). Do narcissists dislike themselves "deep down inside"? *Psychological Science*, 18(3), 227-229.
- Campbell, W. K., Brunell, A. B., & Finkel, E. J. (2006). Narcissism, interpersonal self-regulation, and romantic relationships: An agency model approach. In K. D. Vohs & E. J. Finkel (Eds.), *Self and relationships: Connecting intrapersonal, interpersonal processes*. New York: Guilford. pp. 57-83.
- Campbell, W. K., & Campbell, S. M. (2009). On the self-regulatory dynamics created by the peculiar benefits and costs of narcissism: A contextual reinforcement model and examination of leadership. *Self and Identity*, 8, 214-232.
- Campbell, W. K., & Foster, J. D. (2007). The narcissistic self: Background, an extended agency model, and ongoing controversies. In C. Sedikides, & S. Spencer (Eds.), *Frontiers in social psychology: The self*. Philadelphia, PA: Psychology Press, pp.115-138.
- Campbell, W. K., Rudich, E. A., & Sedikides, C. (2002). Narcissism, self-esteem, and the positivity of self-views: Two portraits of self-love. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28(3), 358-368.
- Donnellan, M. B., Trzesniewski, K. H., & Robins, R. W. (2009). An emerging epidemic of narcissism or much ado about nothing?. *Journal of Research in Personality*, 43(3), 498-501.
- 福岡欣治 (2000). ソーシャル・サポート内容およびサポート源の分類について 日本心理学会第64回大会発表論文集, 144.
- 福岡欣治 (2003). 他者依存性と心理的苦痛の関係に及ぼすソーシャル・サポートの影響 対人社会心理学研究 3, 9-14.
- Gabbard, G. O. (1989). Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 53(6), 527-532.
- 本田純久・柴田義貞・中根允文 (2001). GHQ-12項目質問紙を用いた精神医学的障害のスクリーニング 厚生 の 指 標, 48(10), 5-10.
- Holtzman, N. S., Vazire, S., & Mehl, M. R. (2010). Sounds like a narcissist: Behavioral manifestations of narcissism in everyday life. *Journal of Research in Personality*, 44(4), 478-484.
- Jones, D. N. (2013). What's mine is mine and what's yours is mine: The dark triad and gambling with your neighbor's money. *Journal of Research in Personality*, 47(5), 563-571.
- Locke, K. D. (2000). Circumplex scales of interpersonal values: Reliability, validity, and applicability to interpersonal problems and personality disorders. *Journal of Personality Assessment*, 75(2), 249-267.
- Nadler, A., & Fisher, J. D. (1986). The role of threat to self-esteem and perceived control in recipient reaction to help: Theory development and empirical

- validation. *Advances in experimental social psychology*, 19, 81-122.
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985). 日本版GHQ精神健康調査票手引 日本文化科学社
- 中山留美子 (2008). 自己愛的自己調節プロセス—一般青年における自己愛の理解と今後の研究に向けて—. *教育心理学研究*, 56, 127-141.
- 小塩真司 (2007). 自己愛傾向と自己イメージ・友人によるイメージ間の差異との関連 中部大学人文学部研究論集, 18, 19-33.
- 小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, 8(1), 1-11.
- Raskin, R., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, 45, 590.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 芝本華子 (2006). 自我脅威感尺度作成試み 日本社会心理学会第47回大会発表論文集
- 嶋田洋徳 (1996). 知覚されたソーシャルサポート利用可能性の発達的变化に関する基礎的研究 広島大学総合科学部紀要IV理系編, 22, 115-128.
- 田端拓哉・池上知子 (2011). 自我脅威状況における補償的自己高揚の検討 社会心理学研究, 27(1), 47-54.
- Thomaes, S., Bushman, B. J., de Castro, B. O., Choen, J. L., & Denissen, J. J. A. (2009). Reducing narcissistic aggression by buttressing self-esteem: an experimental field study. *Psychological Science*, 20, 1536-1542.
- Twenge, J. M., & Foster, J. D. (2008). Mapping the scale of the narcissism epidemic: Increases in narcissism 2002–2007 within ethnic groups. *Journal of Research in Personality*, 42(6), 1619-1622.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.
- Zeigler-Hill, V., Clark, C. B., & Pickard, J. D. (2008). Narcissistic subtypes and contingent self-esteem: do all narcissists base their self-esteem on the same domains?. *Journal of Personality*, 76(4), 753-774.
- Zeigler-Hill, V., Myers, E. M., & Clark, C. B. (2010). Narcissism and self-esteem reactivity: The role of negative achievement events. *Journal of Research in Personality*, 44(2), 285-292.

(2013年8月30日受稿)

ABSTRACT

Effects of narcissism on perceived social support under ego threat

Jin KATO, Tasuku IGARASHI, and Toshikazu YOSHIDA

This study investigated the effects of narcissism on perceived social support under ego threat. Participants' perceived social support (emotional support, informational support) was measured before and after they wrote an essay about an ego-threat situation or a control situation. Path analysis was used to examine the influence of narcissism and self-esteem on the perceived support scores after the manipulation. In the ego-threat condition, narcissism was found to have a significant negative effect on the possibility to offer emotional support and a positive effect on the possibility to offer informational support. Reducing the possibility to offer emotional support under ego threat may keep the resource of superiority and competence from expanding on others. Besides, elevating the possibility to offer informational support under ego threat may raise the predominance on interpersonal relationships. Therefore, narcissism may extend the self-concept about superiority and competence via social support.

Key words: narcissism, social support, ego-threat